

尾張町を支えた女たち その肆

---

ソロバンから能楽師を選んだ夫とともに



## 目 次

はじめに	.....	1
親戚の造り酒屋に嫁いで	.....	2
母屋の離れでの生活と稽古模様	.....	4
能楽師として自立したうちの人と尾張町のこと	.....	6
苦しかった戦争の頃	.....	8
手作りの紙相撲と子供達	.....	9
戦後の尾張町模様	.....	1 1
念願の舞台を持てて	.....	1 3
夢のような昔と、長男の能楽師姿を見て	.....	1 4
新しいお弟子さん達を見ながら	.....	1 6
あとがき	.....	1 9

## はじめに

謡やお茶、清元、踊り等の芸事は、稽古を止めてしまえば、それまで何年も通っていようが、全部元の木阿弥になってしまいます。“続ける”、ということの大切な面がここにあります。

尾張町には、老舗が多いといわれます。これは、商いを“飽きず”にし続ける気概を持つ店が多いということに通じているからなのでしょう。それも、親から子へ、子から孫へと、代を越えて“こころ意氣”が伝わり、“こころ粹”にまで昇華されている程に。

今のように物が有り余り、合理的・機能的に物事を判断する社会では、こうした抽象的な内面の事象は、面倒くさがられるかも知れません。けれど、続け守られることの積み重ねの中から、いぶし銀のような価値が、粉れもなく培わされて来ているのではないでどうか。

尾張町界隈の翁(おきな)や嫗(おうな)の方々の年輪を経た体験談は、私達が浅はかに頭だけで理解していることを、やさしく包み込んで、尚且つ正しく導いてくれるようです。気の付かなかったような、物事の成り立ちの意味も、そこで初めて分かるかのように。

時代は移り変わり、未だに連綿と続いている尾張町は、どうして残れたのか。残り得るために何があり、何をして来たのか。たんに過去の尾張名古屋の商人が移り住んだ末裔だとの栄光にすがってばかりでは、現代の移ろい易い社会から簡単に消え去られるはずなのに。

忘れていけないものは、何なのか。尾張町だけに限らず、商業の理論や格好の良い話では尽くせない、先人の築き上げた“こころ意氣(粹)”には、まだ理解出来ないながらも、遙かに時代を超えるものがあったと信じることが大事なのでしょうか。

幸いにも、この街に息づくものを肌で感じている女性にまた一人、貴重な話を聞くことが出来ました。たゆまぬ日常の中から、私達はまた一つの大変なことが発見出来るのではないかと期待しています。

### 親戚の造り酒屋に嫁いで

近ごろでは、あんまり聞かんがになってしもうたけど、うちの人[主人]と私は親戚になるんやわ。私の母と、うちの人が従姉弟の間柄で、分家筋の安江町の紙問屋が実家やったがや。あの頃では、血の近い者同志が結婚することなんて、そんなに珍しいことではなかったし。

そやさかい[だから]、本家の4男さんが東京の勤めから帰って来て、オアンサン[跡取り長男]の仕事の手伝いをするのに身を落ち着けたいというとる。と、聞かされて1~2ヶ月、ちょっとした顔見せもそこそこに11月に嫁いだんや。確か、浅野川電鉄が栗ヶ崎遊園地に連絡された、昭和4年のことやったね。

一緒になっても、姓が同じなもので、最初の頃は結婚した実感が湧かないといふんか。それよりも、満で17歳という年では、まだ娘々(むすめむすめ)していて、実家の花嫁修業もそこそくやったさかい。何んにも分からんままに、うちの人からは、「ジャーマ[妻]になって、こんなことも分からんのか!」と、叱られるばかりの毎日が続いたね。年も11歳も離れている人の言うことやし、泣きたいのを堪えるのが精一杯やったわ。

勿論、ご飯の炊き方なんかは、嫁いでから覚え始めた位や。マキの燃やし具合と水加減だけは、体が馴染まんと上手く出来ないし。最初の頃はお世辞にも美味しいご飯でなかったと思うわ。こんなことやったら、もっと母に聞いて覚えておくんやった、と後悔してもしようもないし。

そんでも[それでも]、商売家に育ったお陰かしら、商いに共通する雰囲気だけは案外に早く馴染めた氣がするんやわ。実家で、日々飽きずに商売している生活に慣れていたもんで、自分でも知らず知らずに辛抱強くはなっていたようや。こればかりは、父や母に感謝せなならんことやった。

私が来たころは、こここの家は大きな造り酒屋をしてたんや。ぎょうさん[たくさん]人がおって、なかなか皆んなの名前と顔を覚えられん程やった。寒の頃になると、能登から杜氏(とうじ)の人達が来て、寝泊まりするんや。それこそ大忙しや。

あの人等の働き具合い次第で、酒の出来不出来がきまるんやさかい。職人さんといえばそうなんやけど、半分お客様みたいなもんやった。機嫌を損ねんようく、食べ物には気を使わされたし、またこっちの苦労も知らんとたくさん食べとったわいね。私ですらこうなんやから、本家のオアンサンの奥さんはもつと気を使って大変やったことやろね。

この店もそうやったけど、造り酒屋の看板は、店先の暖簾(のれん)だけになかったね。杉葉で3尺[90cm]ほどの円い蜜柑形のものを作って、屋根裏から吊るんや。これが酒を造って、売っていることの大きな目印になっていたんやわ。

店先の入り口が土間になっていて、ここに小窓を作つてお酒を売り買ひするんや。あの頃は、今のようにピン売りでなかつたし。



お酒を欲しい人は、それぞれ思い思いの壺や昔風の“貧乏とっくり”を持つ

て来て、要る分だけを樽の栓を捻って、升で分量を計って入れてもらうんや。ほら、貧乏とっくりいうたら、唐津物[陶器]の狸さんが持っている酒壺や。よく見ると、造り酒屋の名前やら、数字(今でいう顧客番号)が入っていて、結構味わいのあるものやったね。

うちの人なんかは気が良いもんで、「もうちょいと、きばってえへな、頼むわいね」といわれると断り切れんで、ついつい普通の計り目以上にたくさん注いでしまい、後で怒られとったね。

いつも私を叱っている人が、今度は母屋のオアンサンに怒られとって、何やらこそがしい気持がしたわ。

#### 母屋の離れでの生活と稽古模様

あのころは、着物に足袋を履いて前掛をして商売するのが普通やったんやわ。着物の帯を締めて、キリッと背を真っ直ぐにした姿なんかは、さすが男さんやと感心させられた。けど、その帯すらもなかなか満足に締めてあげられんし、着物をタンスから出すのも一騒動やったんやわ。

うちの人[夫]のいう着物がどの引き出しに入っているのか分からんで、幾つも開けては締め、「1つ2つ.....、ほらもう5つも開けて！」と、私の懸命さを後ろから覗き込むみたいに言われるんや。母屋の離れに住んでいたんやけど、知らん人がこんなやりとりを聞いていたら面白かったやろね。

そんでも、結婚したんやさかい、うちの人が人前でつまらんことで恥をかいたりせんように、妻として役に立たないかんと無我夢中やった。時間の過ぎるもの、あっという間やったね。

朝は、勿論私が先に起きるんや。あの頃は、仕事を手伝う前に、朝一番で能の稽古をつけてもらいに行く先生がいたんやわ。

江戸時代の頃は、「金沢は空から謡が降って来る(植木職人が木に登りながら謡っていたため)」といわれ、お殿様は能を、庶民は謡を習うのが盛んだったんや。ところが、明治維新からこっちサッパリやった。お金の掛かる芸事なのに、きちんとお金を出してくれていたお殿様が居らんようになって、火の消えたよ

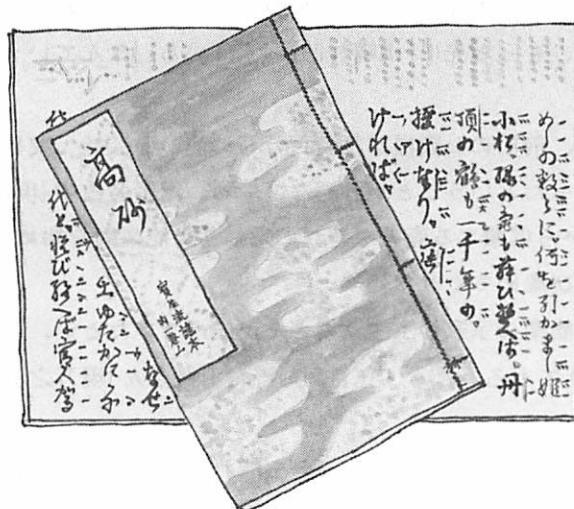
うになったさかいやろね。

そこで、佐野吉之助さんという商売屋の中で熱心な人がおられて。自分の力で能の衣装やら道具とかを買い集め、稽古を積んで、とうとう家元にも認められましたがや。

途絶えかかった金沢の能楽が、これでまた火が燃え上がった程なんやから。その方が、うちの人の先生なんや。この佐野先生に対する師を思う“こころね”は、私等母子に至るまで、今でも深く浸透している程や。

そやさかい、朝ご飯は、稽古を終えて戻って来てから。そしてから、母屋の仕事を手伝う毎日。

やっと一日が終わると、仕事の疲れをものとせず、今度は自分がお弟子さんを前に謡の稽古を始めるんや。



もともとは、金沢商業学校(現県立金沢商業高等学校)で珠算部をこしらえた

一人で、商いの数字には明るく、東京で金庫会社もしていたということは聞いた。けど、小さい頃から商家の手習いとしてこの道に通わされて慣れ親しんでいて、社会に入ってからはしばらく遠ざかっていたのが、どこか道端でラジオから流れる能楽の声を聞いてから、また始めたというだけあって、1本、筋が通っている声やったね。

お弟子さんは、まだ謡を始めたばかりだったので、うちの人の二兄が切り盛りしている尾張町の和菓子屋さんの職人さんやら、母屋の職人さん、親戚の人人が多かったね。私にしても、顔見知りばかりで、少しは気が張らんで助かったわ。

本当は仕舞も教えたかったんやろうけど、まだ完全にこの道で独立しとらんかったし、場所も母屋の離れやったから、気がねしてたんやろね。

#### 能楽師として自立したうちの人 [主人] と尾張町のこと

“尾張町”という響きは、やっぱり何か違うんやね。一向一揆で「おやま」と呼ばれてみたり、もっと先に「山崎村凹市(くぼいち)」なんていう市場の賑わいがあったとか。

私等にすれば、前田のお殿様が加賀百万石の商いと芸能・文化を大事にしてくれたお膝元やったということが肝心なのやわ。尾張名古屋[現在の名古屋市中川区荒子町]から信頼する商人を連れて来たり。能楽師を始め、いろんな芸術家や職人を呼び集めてくれた処や。

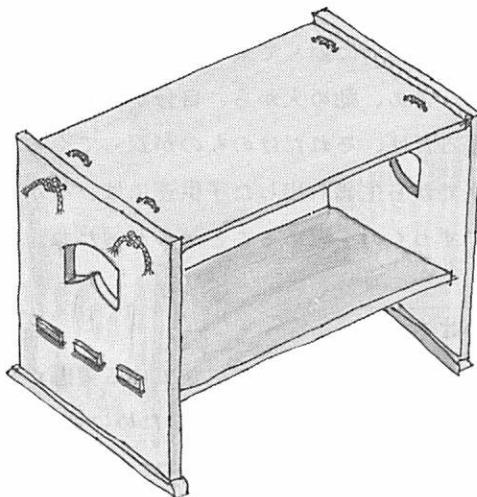
昔は、宝生流能楽の宗家の宝生紫雪さんが住んでいたとか。古い絵図(文化八年1811)を見せてもらうたら、狂言師の野村万蔵さん(現万之丞の祖父)などが、載っているほどなんや。

うちの人にとっても、いよいよソロバンを離れて能楽師として自立するからは、やっぱり尾張町の地でないといかん。親戚の方よりも、商人の町だけれども、金沢で一番芸事が盛んな処だけに地の利が良いと薦められたし。新しい人生の出発は、ここから!と思うていたんやね。

「下にイ〜い、下にイ〜い」と、加賀様の参勤交替の行列が前を通ったといわ

れる下尾張町の一角に住み始めたのは、金沢能楽堂が完成した翌年。昭和8年のことやった。片町に宮市大丸が店開きする一方、新町(尾張町の一本裏通り)の芝居小屋の第四福助座が取り壊されたり。その翌々年には、武蔵に丸越百貨店が店開きするといった目まぐるしいころやった。

性根を据えんと、誰にも見向きもされんようになることを、うちの人が一番肌に感じとったことやろね。私にしたって、もうこれからは、勤めていた頃のように毎月キチンキチンとお金が入るわけでなし、大きく息を吸い込んで覚悟を決めたわね。それに、子供も二人になり、すっかり一家のおかみさんになってしまったもうとったさかい。



うちの人が、これと思ってやることを助けるのが、妻としての道や。少し位苦しいことがあっても、却って平凡な生活よりもいろんなことがあって面白いかも知れん.....。

それから知らんけど、生活はガラリッと変わって来たわね。今までと違うて、お弟子さんの月謝だけで生活するもんで、お弟子さん中心の毎日になって来たんや。

例え、時間が朝であっても、夜であっても、お弟子さんと約束した稽古の時間が、うちの人の仕事の時間になるのや。その間、家の者は一步退いて、うちの人とお弟子さんとの稽古の邪魔にならんように気を使ってたね。食事も、稽古の合間にサッと済まさなならんもんで、あまり重く凭れないように考えて作ってたね。

そんな間を縫うようにして、自立したなりの力量をもっと磨こうと、一人で稽古している姿は、頑固者やったけども、男さんの厳しい美しさを見るようやったわ。

でも、考えてみれば、商売屋にしたってお客様が神様なんや。お客さんのためを思うてすることが、商いに返って来る。お弟子さんを稽古することも、商いの仕方と同じやわ。まあ、勤め人から、自分が商家の主人になったようなものや。頑張れば頑張るだけ、それだけのものが返ってくるんやさかい。

ただ、尾張町に来てから生まれ出した子供達には、なかなかその辺の理屈が分からんもので、ぐずつくのを慰めることが多かったね。

### 苦しかった戦争のころ

世の中、いろいろあるから、こうして生きている実感がするんかね。

この間の戦争のころは、「贅沢は敵、祖国のために皆んな我慢しよう」なんて、言われて、芸事から真っ先に下火になったわね。どんだけ待っていても、稽古には誰も来んようになるし、また行けんかったやろうと思うわ。お弟子さんの謡の声や、子供達の笑い声が嘘みたいに、ピタッと止んでしもうたんや。

おそるおそる、うちの人の氣をうかがっても、とても今からどこか知り合いの店へでも勤めに行く雰囲気でないし。私も、それだけの覚悟はして、自立するのに付いては来たんやけど。やっぱり、家計を預かる者としては、溜め息の出る毎日やった。

「下手に、そこら辺の店に勤めるよりも、一人、卯辰山の山の中へ入ってでも謡い続ける！世間様が、この非常事態に能楽をするのをどうこう噂するのやったら、いっそ誰にも聞かれん方がスッキリする！」

うちの人の、心の叫びが痛い程分かるだけに、正念場のような気がしたわ。もう一頑張りして耐えてみよう。今日まで来れたんやから、あと明日もう一日。その明日が今日になれば、次の明日もう一日……。

どんなにお弟子さんが少なくとも、この尾張町で能楽師として自立することに、大きな張りを持っていたんやさかい。本当に“一所懸命”という言葉通り、一つ処に全身全霊を傾けて頑張り続けられたんやね。

ある日、私が町へ出て、戦争へ行く兵隊さんを、「バンザイ！」と言いつつ見送っていると、その見送られる行列の中に、長い刀を持った人がおるんや。よく見ると、稽古に来るお弟子さんの中に見掛けた人やったもんで、涙がポロポロと流れて来て止まらんのやわ。

まだ、戦争に行かんだけ幸せや。田舎に親戚がなかったもんで、充分な食べ物を子供達にあげることは出来なかつたけど、親子一緒の心のつながりの暖かさだけは教えられたことが、まだしもやつた。

皆んなで食事をする時は、まずうちの人と長男が最初に箸をつけるのや。何といつても、一家の大黒柱の二人やさかい。私や、他の子供達はそれから食べるのや。家の厳しさを感じていた長男なんかは、その特別扱いの中に、将来を背負わなならん！という、いじらしい覚悟の様子が見えていたね。

うちの人が連れて行く処は、長男はたいてい付いて行ったね。けど、好きな煙草を少しでもたくさん貰うために、日曜の朝一番から配給の行列と一緒に並ばされるのにはいい顔をしてなかつたね。長男が今でも煙草を吸わないのも、喉を大切にすることは勿論、そこらあたりの訳があるのかも知れん。

### 手作りの紙相撲と子供達

2歳だった長男も一人歩きが出来るようになると、うちの人は本当に感心するほど、よく銭湯へ連れて行ってたね。早世した男の子が先にいただけに、自

分の志しを継いでもらう大事な子や、という思い入れが強かったんやろね。どうかすると、毎日みたかったわ。お蔭で、風呂好きな子になったのは良かったけど。

子供といえば、あのころの遊ぶものは、ほとんど私等の手作りやったね。今では2～3ヶしか残っていないけど、謡の番数に合わせたといえ、180人の“紙のお相撲さん”を揃えてたのは、こここの家くらいやったろうね。

具合のいいことに、宝生流では昔から、お殿様の前ですぐ出来ないとならない”内”的曲と、ちょっと準備に暇が掛かっても許される”外”的曲に分かれているんや。そやさかい、東と西の取り組みに分けることも簡単やったし。

1つ1つ丁寧に化粧まわしを付け、奇麗に色を塗って、ハサミで切り抜いて”紙のお相撲さん”を仕上げるんや。「大江山」とか、「加茂」とか、それぞれの謡の曲名を順番に筆で書いてると、いつの間にか180番全部の力士になってしまう。

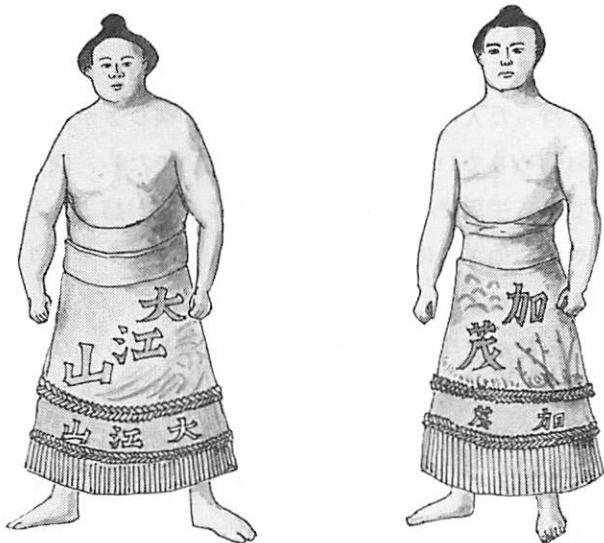
これも手製の箱の蓋の上に、”紙のお相撲さん”を乗せると、たちまち家中が集まって来るんや。

「はっけよ～い、のこった残った！」の掛け声にも、自然と力が入ってくるし。夢中で、私や子供達で、箱をトントンッ とたたいて遊ぶと、時間を忘れてしまうようやった。

身近なことから能に親しんでもらえたら、と願う気持から始まることやけど、こんなに楽しいことやとは、思わんかった。

さすがに、日ごろ稽古以外で遊ぶことに戦しかったうちの人も、ニコニコとして、自分から「景清”ガンバレ、それ”養老”負けるな」なんて力士の名(能の曲名)を呼んで、東西ならぬ内外に分かれ、家族みんなして賑やかに騒いでいたね。そのうち、すぐに負けないように、支えの紙を二～三重に張り合わせた力士を作り、横綱にしてみたり。曲の位の高いものは、大き目のお相撲さんにしたり。

ほら、ここに残っている紙のお相撲さんを見て。こんなに縁の方がボロボロになっているでしょう。どこにも無い、この家だけのオモチャを、こんなに皆



んなして楽しんでいたんや。

長男が、内1番の1が”高砂”とか、外2番の5が”小鰐治”とかいうように、180番の組合せを皆んな頭に入れて、諳(そら)んじているのも、この時の遊びで覚えたんやろね。

#### 戦後の尾張町模様

4月の金沢の空にアメリカ軍の爆撃機が通り過ぎて間もなく、戦争は終わり、翌々年(昭和22年)には、尾張町振興会が出来たんや。人が戻り、賑わいが始めて、ホッと一段落した気持やったわ。

稽古のお弟子さんも、だんだんと顔を出すようになったし。これも、周囲の都合に合わせるようなことをせんと、”この道一筋”的姿勢を貫き通したお蔭かね。笑い声も出て、家中が明るくなつて来たもんね。嬉しいことに、末の男

の子も生まれたし。

私から見ても、うちの人の芸能がこの戦争を通して、何かグンッと深まったようにも思えたわね。それがまた、自然にお弟子さんを引き付けるんかね。

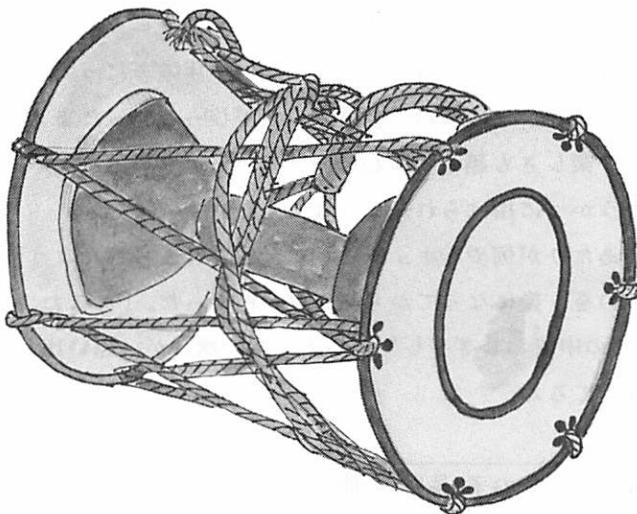
稽古に通う人が増えるにつれて、これまでの半分身内のような人達だけではなく、新しい魅力を持った人に会えるようになって、楽しさが出て来たもんやね。これが、普通にお勤めしている旦那さんの処へ嫁いでたら、決まった時間に送り出して、帰って来る生活では、世間を狭く感じて息が詰まっとったかも知れん。人それぞれやから他さんには押し付けられんけど、やっぱり商売屋の娘やつたから思うことなのやね。

あちこちから、会社や官庁の団体稽古の口が掛かるようになり、出張稽古に出掛けることも多くなって来たわね。地域も、金沢だけにとどまらず広くお弟子さんも増えたし。金沢の能楽会全体が活気付いて来たのや。

また尾張町の旦那衆も、ぼつぼつと稽古に通うようになって來たし。何しろこの町の旦那衆は、昔から加賀のお殿様にすごく信頼されていて、いろんなお付き合いがあったらしいのや。その名残りが今でも続いている、茶道や能楽には玄人はだしに目が肥えている人がおるだけに、本物でないと通用せんのやわ。財産を遺すのに、普通の商人のように”お金”と”土地”だけでなく、”道具”でも遺すという程やから。

また実のところ、ソロバン勘定だけしか能がなかったら、今どきの計算機械[コンピューター]と同じで、単に使われるだけやもんね。値打ちのある商いでなくて、値段だけになってしまって、結局は安売りになってしまいます。好き嫌いやら、いろんなことを思う人様を相手に商いをさせてもらうには、相応以上の豊かな人としての味わいがないと長続きするはずもないし。確かに、ちょっと見にはオットリとしてよく遊びもしたけれど、一つも二つもふところが大きかったね。

お蔭さんで私も、ちょうど子育てが一段落して、太鼓や小鼓の稽古に通わせてもらひ出したのもこのころやった。



### 念願の舞台を持ってて

商いの繁盛が文化を生まれさせる、とどこかで聞かされたことがあったみたい。老舗の並ぶ、この町を見回すと、感心する程のものが一杯あるのやわ。十八代も続く薬屋さんなんかは、昭和の初めに金沢で最初のビルを作って度胆を抜かせたんや。けどそれだけやなくて、3階広間に敷舞台を設けて、定期に能や囃子の会をするような粋な気持も忘れない商人(あきんど)さんやった。

うちの人も、月1回の会にはほとんど出演しに行ってたね。私も付いて行って、エレベーターというものに初めて乗った懐かしい思い出もあったわ。

そんな他人様(ひとさま)の舞台を見ながら、いつかは自分でも舞台を持ちたいと願うのは当たり前やろね。それまでは、お城の中に金沢大学が設置された

昭和24年に、住まい屋の2階の一間(ひとま)を板敷きにしただけのものやつたし。

石川県立能楽堂のこけら落とし(昭和47年)の2年後に、増えたお弟子さん達の協力もあって、3階建ビルを新築して舞台を持つことが出来たんや。ちょうど、宝生宗家が十八代目に替わる大きな節目の年にあたってたね。

出来たての、誰もいない舞台で、うちの人がじっと立ったままになっている姿は、厳しさも楽しさも越えて無心に帰っているようやった。ハッ！として、近寄って声もうかつに掛けられんような.....。

私も、胸のあたりが何やらキュッとして、何も考えられんようになって、頬が濡れているのを、後になってから気が付く程やった。「あなた、お疲れさまでした。」心の中でおじぎをしていると、木の薰りが、思い出したように漂つて来たのを覚えてるわ。

#### 夢のような昔と、あの子(長男)の能楽師姿を見て

そうでない！本に書いてある節ばっかり見ているからいかんのや。”こころもち”をしっかと踏まえて、こう、声が腹の底から広がるようにするんや。ほら、また声が籠(こも)ってしもうた。もう一度、最初からやり直して。

うちの人の稽古は、団体さんの時はそうでもないのやけど、自宅に通って来るお弟子さんには厳しかったわね。謡にしても、仕舞にしても、まして能になつたら尚更、キチンと出来るまで何度もやり直すのや。自分が納得するまで稽古するので、どうかすると時間が長くなったりするのや。

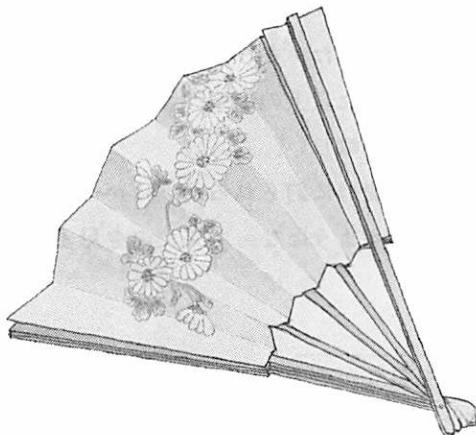
ほどほどにして、どんどん先へ先へと稽古を進むことがないのやわ。軽い気持で習い出した人は、次々と新しい曲を教えてもらえないもんで、しばらくすると止めてしまうんや。けど、こうした教え方がお弟子さんの性に合うと、トコトン稽古に通うようになるのや。

そやさかい、長いこと通うお弟子さんが多かったわね。皆さん熱心な方ばかりで、うちの人の厳しさに良く応えていたわ。

「自分が真剣に習い覚えたことを、誠心誠意、人に教えるのが生き甲斐！」やっ

たことが、そのまま素直に実を結んだんやろね。秘かに、他の社中に対して自慢したい気持になったことも何度かあった位。

嫁ぎたてで何も分からんままに叱られたこと。うちの人が自立した頃の心細さと、戦争中の苦しさ等々。数え上げれば切りがない。



平凡でなかったことが\_\_\_\_\_、

その時々で一所懸命だったことが\_\_\_\_\_、

今では懐かしく、美しい夢のような思い出になって来る.....。

三八豪雪で、6尺(1.8m)以上も雪が積もり、さしもの尾張町の大通りでも自動車が動かなくなった昭和38年の1月末をものともせず、2月に長男は結婚したんやった。

もともと枯れ氣味の声やったんやけど、この頃では、うちの人はあの子がお弟子さんに稽古を付けている席の後ろに座って、じっと黙って聞いているのや。

ちょうど、能舞台でシテ方[主役]が演技する折に、時には袴の乱れ等をそっと直してあげるように、さりげなく後見しているみたい。

うちの人が、いつも謡い続けている喉のためにと、時間を見計らって、お茶を一日に何回も出していたこともあった。今日は、あの人とこの人が来られるんか、と思いながら順番を待っているお弟子さんの間を、頭を下げながら、縫うようにして横まで行っていたのやった。

けど、今はあの子のご新造さんが、自分の夫のためにお茶を出すようになって、私の役目は交替してしもうた。もう、これからはあの子の新しい時代なんや。うちの人や私が辿り着いた以上の未来へ、金沢の能楽界を代表する立派な能楽師として向かって行って欲しい.....。

孫娘が、近ごろではお小使いに釣られるようにか知らんけど、稽古場に顔を出して、カタコトの声を出すようになって来たのを見ると、私もおばあちゃんになったものや。

#### 新しいお弟子さん達を見ながら

この道は理屈だけでは進まないものなんや。どんなに頭が良くなつたって、それで上手になることなんて、あんまり無いことやわ。肝心なのは、続けるという熱意なんかね。

うちの人に稽古をしてもらってた古いお弟子さんも段々に少なくなつて、今のお弟子さんが増えて来るようになったのも、時の流れかしら。今年(平成4年)の3月には、はや、うちの人の13回忌追善能楽大会が行われたんやもの。

そうそう、干支(えと)からいえば”申(さる)年”に当たる年に何かをすることは、”猿”から”去る”へと考えて行けば悪い意味になるんでは、と誰かに言われたこともあったわ。けど、猿は”エテ公”から”得て公”へと、言葉尻りを変えれば良い意味に使えるんやわ。おめでたい祝儀の謡になる高砂の一節でも、「～月もろともに”出で潮の”～」の部分を「～”入り潮の”～」に謡い替えるようなものや。

何かこう、能の世界が、人の心の微妙なキビを現すためか、感覚が妙に研ぎ

澄まされてしまうようになるんかね。言葉の意味にまで縁起を担いでみたり。その日その日の天候や、庭先の花や木に、いろんなものにまで四季折々の季節の変化を敏感に感じてみたりするのやわ。

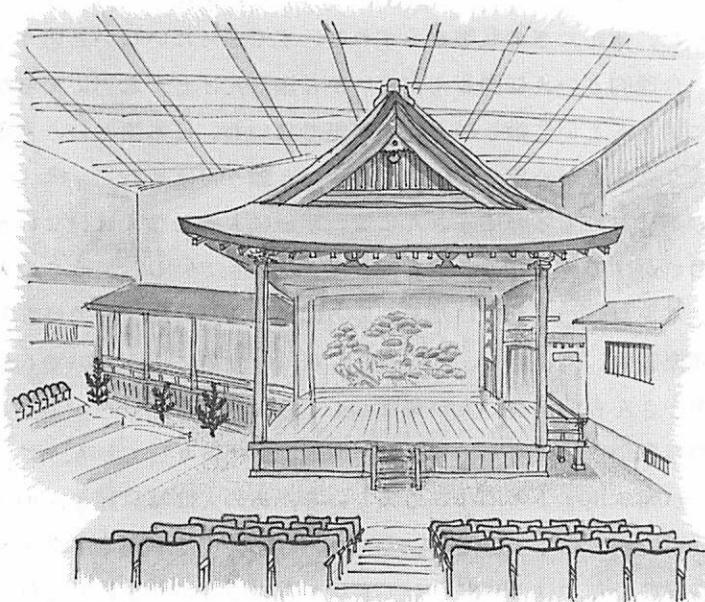
近ごろのおさんは、物のあり余る中で、つい無造作にいろんなものを捨ててしまうわね。昔かたぎの私等からすれば、すぐもったいないと思うてしまうんやけど。合理的といえば聞こえが良いかも知れんけど、本当に大事なものまで、一緒に捨てんといで欲しいと、気が気でないわ。日本語という言葉も、その意味の成り立ちとかを忘れずにいて欲しいと願うだけやわ。

あの子の処においてお弟子さんには、幸いにもそんな人はいないから安心やわ。失われかけている礼儀作法も、まだまだ生きているし。うちの人の肩に、サイコボンボン[肩車]されていたころのあの子から見れば、今ではもう見違えるような能楽師や。何よりも、"こころもち"も立派に引き継いでくれているから、お弟子さんも心地良い人が集まってるんやろね。

尾張町の旦那衆にしたって、もういつの間にか代替りしてしまって、その息子さんやらが顔を出すようになって来ている。あの人は写真屋さんの子供さん、この人は合羽屋さんの子供さんや。と、いい男の人を捕まえて子供さん呼ばわりして申し訳ないんやけど、どうしても昔からのつながりが忘れ去れんのやわ。

それに、嬉しいことに、尾張町の若手の人が、銀行跡の町民文化館で商店街の謡曲教室を始めてくれたことや。さすがに老舗の街だけに、商いの"こころ粹"が息づいているんやね。

せっかくの商い人としての感性を振り切って、能楽の道に入ったうちの人と歩むのに、一番商いの老舗が並ぶ街で大成することになるなんて不思議な縁やったわ。"飽きない"で商いすることは、倦まずたゆまず熱意を持って稽古を続けることに通じるんやわ。一時の打ち上げ花火ではない、絶えることなく次々と世代を超えて、伝えなければいけないことは伝えて行きたいと、心から願うておる毎日やわね。



### 渡辺強子(津代子)・嫗(おうな)について

明治四十五年四月四日生。昭和四年に渡辺荀之助に嫁ぐ。まもなく夫が尾張町の地で宝生流能楽師として自立する。伝統芸能への限りない夫の情熱を支え、渡辺一門・荀宝会の興隆発展に寄与する。

長男容之助、二男他賀男は共に重要無形文化財総合指定。

## あとがき

必ずしも、すらすらとした話ではないのですが、話の途中に”間”を置く、とでもいうのでしょうか。山水画が、油絵のようにキャンバス全部を塗るのでなく、何も描かない余白を設けることで、描いたこと以上のものを語り掛けて来るよう。

3階の舞台から、稽古の声が漏れ聞こえて来るので何気なく耳を傾ける時、フッと話が止む。そんな何も話されない”間”が、語る以上のことを感じさせてくれるようでした。

能が、私達のこころを最小限の動きでもって現す極限芸術との話も聞きます。けれど、理屈っぽいことではなく、語るという”しぐさ”の中から、忘れてならない日本人らしさ、金沢人らしさを思い出してくれるようでした。

とりたてて気張ることなく、それ以上でも以下でもない、といって誇示もせず卑下もせず、ありのままの自然体がここにありました。ちょっと曲がった腰に、着物をきちんと着て、正座している姿には、安らぎすら感じられました。

話を聞きながら、古い価値感とか新しい価値感とかにこだわる以前に、時代を超えて何が大事なのかを問われるようです。

尾張町の本通りに立って見回せば、ほんの330mあまりのストリートと、その界隈の小さな地域の中に、どれほどの貴重な事柄があるのでしょう！生まれ育った愛着を頼りに、この小冊子を出筆し、これからも続けることによって、さらに新たな出会いと発見が生まれるかと思うと、感謝の気持を覚えさせられます。どうか、ささやかな尾張町から発信する小冊子ですが、今後とも尾張町商店街共々に末長いご愛顧の程を願い上げます。

尚、渡辺容之助師匠には、いろいろご助言を頂いたり、資料を参照させて頂いたことをお礼しますと共に、皆様にご報告致します。

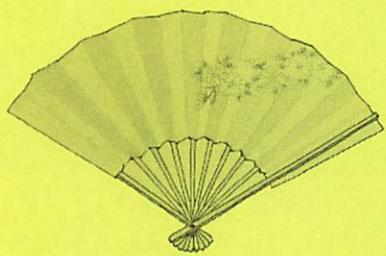
最後に、お腹の底から声を出す人は長生きするとか。心の中から声を出すことは、体の新陳代謝ならぬ”心の新陳代謝”になるのでしょうか。おばあちゃんのお話へのお礼をしつつ、いつまでもご健勝なことを祈念致します。

## 《《 さし絵の説明 》》

項 目	内 容
○ 表紙	「小面(こおもて)の能面」 .....若い女性を現す

<目次>

- 親戚の造り酒屋に嫁いで 「貧乏とっくり」
- 母屋の離れでの生活と稽古模様 「謡本」
- 能楽師として自立したうちの人と尾張町でのこと  
「謡のケンダイ」
- 手作りの紙相撲と子供達 「手作りの紙相撲」
- 戦後の尾張町模様 「小鼓」
- 夢のような昔と、長男の能楽師姿を見て「荀之助師の七回忌追善扇子」
- 新しいお弟子さんたちを見ながら 「石川県立能楽堂」



発行 = 1992年10月吉日

著者 = 石野 瑛一

さし絵 = 村上 隆

発行所 = 金沢市尾張町1丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会